

会 議 録

| | | | | | |
|-------------|-----|--|-----|-------|----------|
| 会議の名称 | | 平成 30 年度第 2 回つくば市総合教育会議 | | | |
| 開催日時 | | 平成 30 年 6 月 27 日（水）13 時 30 分から 15 時 00 分まで | | | |
| 開催場所 | | つくば市役所 5 階庁議室 | | | |
| 事務局（担当課） | | 総務部総務課 | | | |
| 出席者 | 委員 | 五十嵐市長、門脇教育長、鈴木教育委員、小野村教育委員、柳瀬教育委員、倉田教育委員 | | | |
| | その他 | 《教育局》森田局長、大久保次長、中山次長 《教育総務課》貝塚課長、吉沼課長補佐、笹本課長補佐、宇津野係長、青木係長 | | | |
| | 事務局 | 藤後総務部長、吉沼総務部次長、中泉課長、奥沢課長補佐、荒澤課長補佐、高野係長、東泉主査、渡邊主任、鈴木主任 | | | |
| 公開・非公開の別 | | 公開 | 非公開 | 一部公開 | 傍聴者数 4 名 |
| 非公開の場合はその理由 | | - | | | |
| 議題 | | (1) つくば市教育大綱の方針について | | | |
| 会議録署名人 | | | | 確定年月日 | 平成 年 月 日 |
| 会議次第 | 1 | 開会 | | | |
| | 2 | 市長挨拶 | | | |
| | 3 | 協議事項 | | | |
| | 4 | (1) つくば市教育大綱の方針について | | | |
| | 4 | 閉会 | | | |

< 審議内容 >

事務局：ただいまから平成 30 年度第 2 回つくば市総合教育会議を開催します。

本日はお忙しいところ御出席をいただきまして、委員の皆様誠にありがとうございます。開催に当たり、五十嵐市長から御挨拶申し上げます。よろしくお願いいたします。

市長：はい、今日は本当にお忙しいところありがとうございます。ちょっと議事録訂正からいいですか。前回の議事録。「B がほぼ全員ですね」というところ、3 ページ目の真ん中、その次に「今のままやっていけばよいと思う方は」で「一部挙手」で「市長：半分くらいの方ですかね」ではなくて、倉田先生の手が半分だけ上がっていただけなので、これは大きな違いなので、要は実質 0.5 人ということなので、ちょっとテープからは読みにくいかもしれないけどわかるように訂正してください。

事務局：訂正いたします。

市長：前回いろいろと議論していただきましたが、今日もその続きということをお願いしたいと思うのですが、この週末に日本の若手の各界の人が集まるイベントというか、合宿プログラムに行ってきました。本当に企業人、政界、宗教家、学者、色々いて、色々なディスカッションやこれからの日本をどうするのかという話をしたのですが、そこで非常に衝撃を受けたのですが、大手企業の社長とか上場企業の役員とか、本当に上場企業の色々な人が集まって、政治家とかいるなかで、自分の子どもをどこにいかせているかということ、みんなインターナショナルスクールと言う。みんな今のトップリーダー達です。世界でも活躍しているような連中で、みんなインターナショナルスクールと。何でと聞くと、別にどこがどうじゃなくて日本中の問題だろうけど、公教育につらい思い出しかない。要はちょっと賢いわけです。賢さというのは、危うさの裏返しではないけど、要は学校に適應できなかった、だからいじめられていたか、あるいは恐ろしくつまらない授業だったか、とか、いわゆる近代公教育で均一

的に教えていく方法というのは耐えられなかった経験というのをみんな持つていて、そういうところに自分の子どもを入れたくないというので、ちょっと恐ろしくなりました。それから学者たち、結構スタンフォードから来ていたけど、彼らに言わせると、もっとやばいなと思ったけど、もう日本の大学なんかゲームオーバーでしょみたいなことを言うわけです。何もない日本の大学、人材もないし、お金もないし、そんなところに行っても何も未来ないみたいな感覚で日本は見られている。そういう状況に我々はいて、その中で僕が言ってやったのは、いや、絶対あなた達みたいな人の子どもをつくばで公教育を受けさせたいと思うような街にしようと思っているからよろしくね、という話を僕はしてきた。それはおそらく色んなところで起きている問題なのだろうし、公教育のやることじゃないよという議論もひょっとしたらあるかもしれないし、全然別の学校でやったほうがいいという話なのかもしれないし、でもそうでもないと思っているので、今日の皆さんに投げかけている問いの部分で、どこまで今日もいけるかわからないですけど、とにかく本当に相当な危機感を持たなくてはいけないと思うし、学校に適應できないからといってそれは能力が低いわけでは決してないわけで、逆に言えばそういう才能をどう伸ばせるかという、柳瀬先生、小野村先生はそういう特殊な力を持った子どもたちと日々関わりが多いと思いますが、そんなことも含めて本当にもう考えなくてはいけないことがすごくたくさんあると思います。だから今日どこまでいけるか正直わかりませんし、鈴木さんにはお詫びしなくちゃいけないんですけど、何か勝手にスケジュールの変更を、ロードマップをしちゃったみたいで本当申し訳ないです。その辺は後で事務局から説明があると思いますので、お詫び申し上げます。ということで、ちょっと思っているのは、我々で議論してもいいけど、やっぱりここに色んなアプローチしている人に来てもらって話をして、そういう人に聞きながらディスカッションするなんて観点も必要じゃないのかなと色々思っているものでどうぞよろしくお願いいたします。以上です。

事務局：五十嵐市長、ありがとうございました。それでは協議事項に移りたいと思います。本日の会議ですが、手元に配布しております次第に従いまして午後 3 時までを予定しています。今回は議事が 1 件となっております。限られたお時間ではございますが、どうぞ宜しくお願いいたします。

【配布資料の確認】

(1)つくば市教育大綱の方針について

市長：さっき言ったロードマップについて、ちょっと書き換えてしまったことについて、ちゃんと説明をしたほうが良いのではないのでしょうかね。皆さんに前回配布したものとこれが違うので。

事務局：それではこちら資料 1 のロードマップ個票というものですが、これの中段下あたりに教育大綱策定のスケジュールが載っております。当初は、第一回の会議では、30 年度内の策定を目途にスケジュールを組んでおりましたが、今回ロードマップに掲載しましたとおり、策定の完成が平成 31 年度半ばをめどとして作っていきたいと考えております。今年度については、今回の総合教育会議などでの意見を組み入れながら、それからまた各校長等の意見を取り入れながら策定の基本を作っていく流れにしたいと考えております。31 年度に入りましたらそれを基に教育大綱を作っていく流れでいきたいと思っております。

市長：はい、そういうことで大変失礼いたしました。ありがとうございました。では前回の続きですが、私さっきから先に勝手に議事録の話をしてしまいましたが、他に気になったところありますか。

小野村委員：確認させていただきました。

市長：はい、わかりました。前回は 2 番までしか行けなかったわけですけど、この順番に行きましょうか。

卒業時に子どもが知っているべきことは。

市長：卒業時に子どもが知っているべきことは、というこれはどういう意図かという、結局卒業時に子どもが知っているべきことは、何なのかなと思うのです。これは局長、いわゆる指導要綱には、かなりこう卒業時に手に入れているべきものとはとか書いてあるのですか。

教育局長：学習指導要領では、卒業時というより学年ごとに各教科でこんな力を付けてほしいということは書いてあると思います。

市長：なるほど、例えば、義務教育を終えるときにこういう子どもであってほしい、こういうものを獲得してほしいというのはどのくらいのもので書かれているのですか。

局長：教科ごとで書かれていて、実際に今から議論しようとする生きる力というか、社会の中で生きていくのに必要な人間としての素養的なことはあまり書かれていないですね。

市長：あまり書かれていないのか。我々子どもが知っているべきことは、もちろん読み書きソロバンというのは当然ありますが、何を子どもに卒業までに知っておいてもらいたい、あるいは獲得してもらいたいと思って教育をすればいいのかなと。逆に文科省で示されていないようですから、つくばで作ってしまえばよいのかもしれないですけど、どこから始めればいいのでしょうか。例えばどんな要素があると思いますか、柳瀬先生どう思いますか。

柳瀬委員：これは大学で教わったのですが、実質陶冶と形式陶冶がある。「陶冶」というのが教育という意味なのですが、何を勉強するかということと、学習する能力というのを分けて考えるというのがあると思うのです。これは門脇先生の方がお詳しいですが、ですから、袋の、入れ物の中に何を入れるのかということと、その袋自体を考える、それがおそらくカリキュラムを考える時にずっとこの二つの間を揺れ動いていくのだと思います。あまり具体的に何を知っているべきかというのを決めてしまうべきだということと、そうではなくて学ば力があればそれはもちろん時代も変わっていくし、必要なものも変わってい

くわけです。私の小さいころはコンピューターなんて習わなかったけれど、コンピューターをいじれなければだめだというのが普通の内容になる、だけどそれはちゃんとテキスト読んでマニュアルを読み込ませれば誰にでもできるよねというのは、それはやっぱり理解力という力なのです。そういう風な考えがあります。

市長：ありがとうございます。中身と袋とね。門脇先生、陶冶について思うところ、二時間くらいにまとめていただけると、きりがいいだろうけど。陶冶って概念は本質まで遡るすごく大事な概念だと思うけど。

柳瀬委員：ごめんなさい、陶冶はドイツ語でビルトングって言って、形作るって意味だから、ちょっとどっちかっていうと公教育とか外からとか上からの、啓蒙的な考え方なのです。だから今はもう陶冶という考え方は使わないです。

市長：その批判に対して、それを自分で形作っていけるようなものという見方もできるのかなと私は思っているところで、まさに自分で袋とか枠をどう作っていくのかと考えると、まだ発展性がありそうと思っているのですが。倉田先生どうですか。卒業時に子どもが知っているべきことは、あるいは獲得しておくべきものはとか。

倉田委員：私の持論でもあるのですが、自分を知ることが大切なのかなと思います。要するにそれは人を知らなければ自分の良さもわからないわけですから、能力面、人格形成面を全て含めて自分がどういう人間かをわかってほしい。それで行く先、その先の方向性が自分で見えるような方向に卒業時に自分が考えて進められるようになれば、学校教育というのは、意味を成すのかなと私は思っています。そういう意味では結局集団や組織の必要性を基本的には分かってほしいです。個人だけの問題ではないと、大きい意味では気付いてほしいなど。

市長：自分のどんなことを知っていればよいですか。

倉田委員：これは自分の思っている特性、どんなものに向いているか、能力と

か行くべき、進むべき方向性、自分がどんなことで社会のため、自分を活かせるのかとか、という方向性です。自分の目標を持てるような、それは夢にもつながると思いますが、そういうことで集団の中で自分がどうあるのかと、あくまで個人だけの問題ではないということ、学校生活を送って、卒業する頃には気づいてほしいと思います。

市長：自分の特性や、何に向いているかというのは、どういうことをすることで獲得されていくものでしょうか。

倉田委員：私は基本、体験からしか人間は学べないと思っているので、学習もそうですが、全て自分が体験することは学習になると思いますが、そういう経験値をどれだけ多く持つか、そういうことを仕向けて行くというかと与えていかなければいけないのかなと思います。

市長：はい、ありがとうございます。鈴木さんはいかがですか。

鈴木委員：すごく難しく悩んでいるところですが、一つに絞ることはできないのですが、一つはやはり次の4番とかかわると思いますが。

市長：自由にしゃべってください。

鈴木委員：一つは義務教育を終わって、これから自分が働く、社会で生きていく中で獲得したい知識や技術などがあるときに、何をしたらそれを得ることができるのか、その方法を自分で考え抜くことができ、自分なりに答えを出すことができる、ちょっと抽象的な話ですが、もう一つは、今の学校に欠けていると思うのであえて言いますが、周りの人と話し合う力、話し合う方法を獲得してほしいと思います。子どもたちを見ていると、話し合いがとても下手だと思っていて、話し合いを尽くさずに、割と乱暴に多数決をよくして、多数決で勝ったほうが正しいみたいなことをよくやるのですが、そのやり方を私はだいぶ心配していて、そこを学級会なり小さいことでもいいのですが、子どもたちが話し合う方法とかを身につけてほしいと思っています。

市長：ありがとうございます。知識そのものよりもそこに向かうための方法論

を自分なりに獲得していくということですかね。それはその対話も含めて。

小野村先生どうですか。

小野村委員：一言でいえば「社会力」ということになると思います。私なりの解釈ですが、「社会性」と「社会力」とでは、意味するところが違う。「社会性」は身につけていくもので、モラルという意味で使われることが多いと思いますが、「社会力」というのは社会の中で自ら学び取っていく力だと思う。そういう意味では、「社会力が大切だ」ということを子どもたちが知っているということ、さらに違う言い方をすれば、世界の有り様、世界が広くて多様であるということ、その広い世界に自分がいて、その中で学ぶことが楽しいと感ずることだと。

私は英語教師ですが、先日、ある雑誌の見出しに「まずはインプット」とあるのを目にしました。外国語学習には「インプット仮説」というものがありまして、とにかく音声なり単語なりいっぱいインプットすることがあって、その後にアウトプットが始まるというものです。

30 何年経ってやっと気づきましたが、ここが根本的に間違えていると思いました。というのが、今の子どもたちは学校で下手な単語なんか教えられなくても大体、ある統計をもとに現在に当てはめると、約 2000 語くらいカタカナ語を知っている。それも英語としてそのまま使えるもの、ちょっと応用すれば使えるもの、そういった子どもが持っているものを活かさずに Hi, Nancy. から始まっているのが今の授業なのであって、インプットよりもまず世界の中に英語という言葉があり、それを学ぶと楽しいということが分かれば必然的に自分で学ぶ力が伸びると思います。

市長：ありがとうございます。教育長、どうでしょう。

教育長：その前にイエナプランの資料は市長が手配したものでですか。

市長：僕が指示を出しました。どの資料を渡したかは見ていないですけど。

教育長：その資料を見て、「世界のあしたが見えるまち」を実現するために「つ

くば市は世界のあしたの教育のトップランナーになる」となると言っていたのだけれども、世界のあしたの教育というものをほとんどイエナプランは先取りしているなど資料を見ながら思いました。具体的に「世界のあしたの教育トップランナー」のために今のつくばの教育をどう変えるかということに相当具体的に考えなければいけないと資料を見ながら思ったところです。その資料を見ながらいわゆるイエナプラン教育は何を目指しているかということ、ほとんど私の考えていたことと重なっています。例えば、その中の一部を紹介すると、まず産業社会あるいは産業を発展させるための教育ではありません。他の人たちに貢献する市民を育てる。才能にかかわらず一人一人の尊厳が認められ支援される。幸福な大人を育てる教育。学習を他者と一緒にやる。他の人と一緒に生み出しお互いの関係を作ることを学ぶ。他の人との相互作用が大切。学校はその練習の場所、あるいはお互いを高め合う場。関係性・関わり方を高めるとか、先ほど鈴木先生が言ったようなことと重なるとは思いますが、これはすべて社会力としてまとめられるかもしれません。あるいは自分で考え共感力を持つ、これも社会力の重要なポイントです。自分が社会に働きかけ協働できる市民を育てる。断片的に紹介したが、ほとんど私自身社会力を育てることの中身として考えてきたことです。近代公教育制度というものは 150 年経っていますが、制度疲労を起こしているというのが私の考え方です。こういうイエナプランの教育をやってきた結果、オランダの子どもたちが世界で一番幸福だと回答していることにつながってくる。教育の義務ではなくて教育の自由。自由、自由、自由。自分がこの一週間何を学ぶかを月曜日に自分でカリキュラムを作るということをやっているとか、1 年から 3 年までの異年齢でクラスを編成しているとか。日本では制度面でがっちり固められていますので、その中で変えていくことはなかなか大変だと思いますが、教育の仕方、方法とかあるいは内容とかはつくばで新しいものを目指せるのではないかと思いますし、その中で具体的にどういう形

でやっていったらいいのかを大綱を決めていくときに考えていかないといけないと思っています。こういうことをやっていれば子どもたちは学校に行くのが楽しいし、卒業時点で相当前向きな社会に貢献できる人間として育ていけるのではないかと。在学中でも楽しい、楽しい、楽しいの連続で過ごしていける、そういう教育をつくばで実現していきたいなと思いながら資料を読みました。

市長：ありがとうございます。イエナプランについては一回くらい回をとってやりたいなと思っていて、どっかのステップにしようと思っていたのですが、ここで外部の動画は映せますか。イエナプランの動画を10分くらいにまとめたものがすごくわかりやすいのですよ。僕のパソコンを持ってきてやってみてください。オランダで今非常に注目をされている、大体教育長が説明されたとおりなのですが、僕もとても魅力的だと思っていて、オランダに行こうかと思っていて、現場を見てこようと思っていて、イエナプランなりの答え、今回出している問いの答えが全部出ていると思う。100%コピーはしなくていいでしょうけど、色んな要素がイエナプランとしてなっているけど、たぶん社会力を具現化するとああいう教育になるのだろうと僕は思うのです。ですので、イエナプランについて思っていることがあればしゃべってもらえますか。鈴木さんありますか。

鈴木委員：少しだけずれますが、門脇教育長が社会力とおっしゃられていて、ほぼ共感しているというか賛成ですが、すごく悪意を持って社会力という言葉聞く時に私が一つだけ引っかかることは、どうしても社会に貢献するとか、他者に貢献するとか、全体が先にあるように聞こえる時があります。私はやっぱり子どもたちが個人の幸福とか幸せとかを考えるのが先だと思っていて、その後に他者への共感とか他者への理解とかの中で、公に貢献していくとか公のために自分の夢とどう折り合いをつけるとかを考えていく、私はその順番の方が良いのではないかと常々思っています。どうでしょうか。

教育長：しゃべると大学の講義みたいになるけど、私は自己認識を高めるためには他者認識の方が先だとずっと大学でも強調してきました。他の人のことを我がことのようにわかるような人間になってはじめて、そういう人からあなたはこういうことが良くできますね、だめですねということと言われることによって初めて自分の認識が可能になる。最初から自分のことを自分でわかるような人間にはなっていないということですね。

鈴木委員：すみません、うまく説明できなくて。その通りだと思います。それでも日本の教育を見ていると、全体のためとか、他者に感謝しなさいとか、ともすれば経済界の要請に教育を合わせるようなところが危険かなとどうしても感じます。他者への共感や理解があって初めて自己がわかるというのはその通りだと思うのですが、どうしてもそこに自分はどうしたいのかということを考えていくことがちょっと抜けているのではないかと私は思っています。

教育長：抜けているということをお前は全然意識したことはないけど、社会力ということでは、他の人に貢献しなさい、自分が役に立ちなさいということが産業の発展に貢献しなさいということと同じになってしまうと心配しているということですか、鈴木さんは。

鈴木委員：個人の幸せの集まりが全体の幸せだと思っていて、そこだけを間違えないようにしてほしいなと思っただけです。

教育長：イエナプランで言っていることは、本人の性格や才能にかかわらず子どもたち一人一人の尊厳が認められ、それが支援される教育をしている、この根本はまったく同じだと思っています。それで一番新しい本でも書いてあることですが、学校教育で何をやるかということ、よき自己実現が可能になるような力をつけてあげる。一人一人のよき生を実現するための能力を育ててあげることが学校の教育の基本になるということ。それを自分一人では自分が望ましいと思っている生涯、生を、人生を実現するのはなかなか難しいのでお互いに誰かがこういうことを実現したがついているなと思ったらその時点で助けてあげ

るということをごく自然にやれることが、社会力があると言っているわけです。だから才能とか性格にかかわらず、一人一人が幸福な人生を送れるようにしてあげましょう。そのためにどういう能力を学校にいる時点でつけてあげたらいいかを先生が一人ひとりを見極めながら、この子だったらこういう力をつけてあげましょうとその子の先を見通しながら力をつけてあげることが先生の役割だと思っています。

市長：大丈夫ですか。最近ほんとにリーダーシップ開発なんかでもよく使う言葉がケーパビリティという言葉をよく使うけど、教育長が「よき生を実現させるための能力」と訳しているけど、才能とかではなく、単なる能力というよりは、自分自身を知り働きかけることを含めて自分も周りもよくしていける能力なのですが、このケーパビリティというのは、そういうものを前提としている社会力というものは決して世の中に支配されるようなものではないと、そんな解釈はしていないだろうけど。

鈴木委員：すごくよく理解しているのですが、そういう風にとらえる人がいるのかなと思って。

市長：そういうことも含めて、イエナプラン一色にするつもりはないので、ちょっと先に行きますけど、今色々みなさんおっしゃっていた入れ物を考えると、自分で獲得する力をつけるとか、自分自身を知るとか社会力とか、目指しているところは全然ずれていないというか、むしろ全員一致しているような印象を受けたのですが、そこに向けて学校は何をする場所なのか、何をすればそういうものが獲得されるのか、先生の役割は何かという5番の問いと近いところですけど、まとめて答えても良いし別々でも良いですし、子どもたちが卒業時に何をすれば良いかという話です。これも難しいですが、どうですか小野村先生。

先生の役割は何なのか。

小野村委員：5番の「先生の役割は何か」の方を先に言わせていただくと、一

言で「ファシリテーター」かと思っています。先日も「ファシリテーションぐらい簡単にできます」という方がいましたが、実際、この役割は非常に難しい。

言い換えれば、角度を変えて「コーディネーター」としての役割、特に社会力を養う上では地域と子どもたちとの協働のためのコーディネーターという人の役割も重要になるとと思っています。

その上で、学校は何をするところかというところ、私がイメージするところでは、学校は苗床であるべきものなのかなと思っています。ただし、発芽をする、芽を出し双葉を広げるのは、子どもたち自身なので、それに周りが無理矢理成長剤を入れてせき立てるようにしてはいけません。もちろん子どもたちを支えるべきところは支え、基礎基本はしっかり栄養補給をしながらも、子どもたち自身が芽を出せるよう双葉を広げられるようにする苗床であるべきだと。更に地域社会はそこに光を注ぐ太陽のような存在で、苗床と太陽が組み合わさって子どもたちが子どもたちなりの伸びをする、それを支える場所だと思っています。

市長：なるほど。ありがとうございます。例えるとわかりやすいですね。

鈴木委員：私も小野村委員が言ったように、ファシリテーターが先生の役割ではないかとまさにそう思っていたところですけど、学校は何をすところなのか、学校にどうあってほしいのかということになりますが、子どもたちが自由に発言して自分がこうしたいのだと自分を表現することを保障するところだと思っています。そうすることでしか色々学んだり獲得したりできないと思うので。そしていっぱい失敗できる場所だと思っています。

市長：いっぱい失敗。できないですね今はたぶん。失敗こわい。アメリカで一番有名なビジネススクールの唯一の日本人教授に聞いたら、失敗をしていないと成績が低い。あるプロジェクトをさせて、起業させて、お前はこの半年間どんな失敗したか、それによって成績が変わる。僕はこんな失敗しました、だから僕はこんなに学んだのですと。逆に、例えば起業してうまくいっちゃいましたと、すると君は学びが少なかったね、ということを行っている人がいたなと

思っ、失敗良いですね。

教育長：イエナプラン教育では先生のことをグループリーダーとも言っている。

市長：ちょっとイエナプランに引っ張られすぎかもしれないので、4と5のテーマに戻りますが、倉田先生はどうでしょう。先生の役割は。

倉田委員：お二人が言ったことと同じですが、学校における先生というのは、やはり支援者であるべきなのだと。さらに人の魅力を見せる。だから教師は魅力的でないといけないのではないかと。ある程度モデルになることも必要なのかなと。それで引っ張っていく、子どもに気づかせていく、自分を高めていく、そういう環境づくり。それは当然仲間作りもそうだし、個性の主張もそうだし、そういうものを示せる組織体であることが学校なのかなと。

市長：ありがとうございます。柳瀬さんはどうですか。

柳瀬委員：学校をひとつの舞台であると考え、先生は、役者ではなくて演出家であったりプロデューサーであったりする立場で、実際に子どもをひっぱりあげることも必要だし、後ろから押し上げることも必要だし。時には見ていなきゃいけないこともある。非常に演出として色んな役割を果たさなければいけない。子どもによってずいぶん違うと思う。そういう舞台を用意しておかなければいなくて、子どもたちが主役として演じていなくちゃいけない。事細かに演出家が言っていたら役者は育たない。そんな場所だと思います。

市長：ありがとうございます。さすが芸術家。教育長、どうですか。学校は何をするところか、先生の役割は何なのかと、社会力という言葉を使わないで説明してもらっていいですか。

教育長：先生が一番大事な役割は子どもたちのケーパビリティを高めること。一人一人がこんな一生を過ごしたい。こんな一生だったらいいなという考えを正確に理解してそれを実現するために必要な能力をその子その子に応じて育ててあげることが先生の重要な役割だと思っている。そのためには、イエナプランに戻りますけど、グループリーダーというような役割を先生が

やるというのは、10人とか20人が輪になって先生と色々な会話をするというを通して、この子はこんな才能がある、持ち味がある、こんなことを考えている、こんなことをしようとしているということを理解する必要がある。そういう場所として学校はないといけないというのが一つと、あとは社会力を高めることに当然つながっていくのだろうと考えていますが、それと同時に意識しながら子どもたちの支援者になることが一番重要じゃないのかと。とにかく学校は楽しいところ、先生と話す、友達と話すことがとにかく楽しい。楽しいことができる場所。またイエナプランに戻るが、教室はそれぞれのクラスで全く違うような場所になっているということもきわめて重要なことだと思います。日本の教室はどこに行ってもワンパターンですけど、そういうことになっていない教室をどういう形でつくばで実現していくかということもしっかり考えないといけないことだと思っています。

市長：それではそういう目線を含めて、音も出ますか。

イエナプランの動画を一同で視聴

市長：本編を買うと続きが見られるので、教育局で買ってもらえますか。これは買ってもらって教育委員の皆さんにも回してもらったほうがいいと思います。僕も見たいし。ということで、明日の学校に向かってということですけど。イエナもそうだし、色々な国の教育、教育モンテソーリがあったり何があったりですけど、今おそらく世界が志向している方向性のかなり強い部分の中にイエナプランがあると思います。日本ではまだ少なくとも自治体レベルで取り組んでいるのはどこもないはずですよ。今長野で軽井沢のインターナショナルスクールオブアジア、本当のインターナショナルスクールを日本に作ろうと頑張っている小林さんという人がいて、彼女たちもイエナプランに注目していて、長野県が実験的に何かできないのかなと、あの知事は非常に教育に熱心なので、長野は教育県だと常に言っているんで、森の幼稚園、森の保育園という

のがあって、園舎を持たない自然の中で教育していくと。ちょっと前なら際物扱いされていた話ですけど、そうでなくなっている。世界の潮流がそういうものの価値を認識してきて、ちゃんと専門的知見からも効果があるのだと徐々に見えてきて、長野県の小林さんがエビデンスを取れないかって世界的な研究者がアプローチしてきたということで、ちょっと待ってつくばでやってよって話をしてきたんですけど。これを見ちゃうと引っ張られるかと思って、もうちょっと後にしようかなと思っていたのですが、イエナプランの話を教育長がせっかくしてくれたので色々話をしましたけど。今のものを御覧になったことありましたか。

教育長：柳瀬さんはシュタイナー学校にも行ったでしょ。今のものを見ていてシュタイナーとどこが同じでどこが違うか。

柳瀬委員：方法論としてはかなり近いですよ。ただ、その背景に流れる人間観とか考え方は、必ずしも一緒ではないと思います。シュタイナー学校の人間観はちょっと特異です。その部分を別に気にしなければかなり近いかもしれない。ちょっと気になるのは、イエナ教育のバックボーンというか、オランダの教育は前から進んでいるけど、現場とか体験を大事にしていた教育システムだったと思うのですが、どちらかというとコミュニケーション能力、社会力ですけど、そっちを意識的にもっていて、戦略的な感じはします。これでオランダ社会を再構築していくんだみたいな力は感じます。おそらく、次の脱産業社会をどう生き抜くかみたいな大きな意味での戦略プランなので、それは間違っていない。ただこれまでの学校教育の歴史の中では公教育に対する個人の幸せというせめぎあいはずっと続いている。日本でも、期待される人間像というものが産業界から出てきたときに、教育界から大反対したわけです。国が人間像を定めるべきではないと皆で頑張ったわけですが、徐々にその流れが来ていて、それに対してちょっと違うでしょという大きなチャレンジだと思う。

市長：ありがとうございました。倉田先生どうでしたか。率直に。

倉田委員：考え方は理にかなっていると私も思う。個人も尊重するし、集団とか組織のあり方も重要視している。一つのまとまりとしてどう考えるかという考え方が根本的に今までの考え方とは違っていると思っていて、グローバル、広い意味で集団の在り方を作っていくということを重要視しているところが非常に印象に残りました。

市長：小野村先生はどうですか。

小野村委員：御存知のように、私は教員を辞めて不登校の子どもたちの教室を開いています。そこで目指してきたものはある意味このイエナです。柳瀬委員からの御指摘に同感するところもあり、そこに日本なりのものを加味修正する必要があるのかなと。ヒューマニズム（人文主義）というものがルソーあたりの時代から変質し始め、それが 20 世紀以降に良くも悪くも影響を与えています。その中で日本なりの、つくばなりのプランをアレンジしていく必要はあるのかと思います。ただ、基本的な方針は子どもたち一人ひとりに、先ほど私は苗床という表現をしましたが、比較的バランスよく苗床に光りを注いでいるのかなと。

以前、「プロ教師の会」の代表の方が、「日本の学校は渋谷の街化してしまっている」ということを言っていました。そういう面もあるでしょうが、逆に言えば学校は子どもたちを抱え込んでしまっている。大きな屋根で覆ってしまっていて、自然光も当たらない、蛍光灯の下で育ててしまっている様なイメージがあります。そういう点でイエナプランは大いに参考になるのではないかと。ただ一方で、私自身今までずっと、18、19 年やってきて非常に難しいと思うのは、無学年と言っているも、スタッフの中では「今、何年生だからこうしなきゃね」という話しが再三出てくる。そこは繰り返し、繰り返しやっていかないと既成概念から抜けだすのはなかなか難しいと感じています。

市長：心の壁の部分のほうを超えるのは大変だったりするのですね。制度は変えられても。鈴木さんはどうですか。

鈴木委員：他の委員さんが言っていることとほぼ同じ意見です。柳瀬先生はシュタイナーなどお詳しいですけど、私は児童学科なので、子どもの教育についてはだいぶ学びました。もう古い知識になってしまっていますが、古くないところもあって、ルソー、モンテッソーリ、私はジョンロックを専攻していたんですけど、卒論ですけど。子どもとか教育とか、もっと言ってみれば女性とか結婚の在り方とかをそのものについて論じられることは昔からあまりなくて、古くは絶対王政の論理を反駁するために家族論を語るなど、ロックとかもそうですが、他の目的のために家族のこととか教育のこととかをダシに使うというか、語られることが多々ありました。私は、教育そのものを語りたいたいつも強く思っています。それが一つ。そして今の映像を観ていて、なかなか今の学校には、一足飛びには当てはめることが難しいと感じます。皆さんが思っているよりも学校は管理が多くて、うちの上の娘なんかも、学校のノートのとり方さえも、細かく指定をされていて、予習のノートの書き方もコピーされて配られて、だいぶ反発して言いに行っ、私のやり方でやらせてくれと先生と交渉しているみたいですけども。なぜそんなに管理をするのかなと親としても常々感じているところです。どこをどういう風に実際の現場にこういう理念や考え方を取り入れていくのかという、具体的なやり方はなかなか難しいなと感じました。

市長：ありがとうございます。そうですね。よくわかりませんよね。言いたいことはたくさんありますが。いちいち大騒ぎになっちゃうので我慢します。次の6、7、8はかっこですけど、6、7は別の問題なので、今の話の続きでいうと、この間は我々がどういう風に持つかっていう、子どもはどういう存在なのか、というものをどこかで共有したいのです。そこが共有されなければ、子どもに向けられていくものに対して子どもがどういう存在なのかということが定義されていないと、共有が少なくともされていないと我々の向かう方向は見えないと思うので、子どもって何だろう、例えば赤子な

のか、神なのか、アーティストなのか、子どもってどういう存在なのだろうというのをそれぞれの御経験の中でお聞きしたいのですが、小野村先生いかがですか。

小野村委員：まず一つは、仮に私が第 3 ランナーだとしたら、目の前にいる子どもたちは第 4 ランナー。リレーのバトンをつなぐ次の走者であって、そういう点では第三走者か第四走者だけの違い。第一走者でなければアンカーでもないので、基本的には変わらないと申し上げておきます。

ところが、私たち教師はその最たるものだと思いますが、先日もある子が、「何か勘違いしている」と教師に対する怒りをぶつけてきました。「先生たちは自分を偉いと思っているよね」というのです。たかが 10 歳、20 歳くらいの違いなんて歴史の中では違わない。私がちょっと聞きかじった科学の話をする。しかし目の前の子はあと 20 年したらノーベル物理学賞をとるかもしれない。そういう子に対して私たちは知ったかぶりをして喋っている。

そういう子に限って、先ほど市長もおっしゃいましたが、テストで点数をとれなかったりもする。先ほどの子も「私の何をわかっているのか。上から目線でいうのはやめてほしい」と怒っていました。

ここまで「違わない」ということをお話しましたが、ここからは正反対に「違う」という話を。小学校入学前後の子供の視野を体験してもらおう「チャイルドビジョン」というツールがあります。実際にやっていただいたほうが良いと思いますが、子どもの視野は横が大人の 150 度に対して 90 度、ホンダの研究所のデータですが…。子どもたちは私たちが思っている以上に視野が狭い。

「大きな人」と書いて「大人」、「子ども」を「小さな人」と書く。しかし子どもは大人を縮小したものではない。子育ての最中、私たちはつい「何しているの」「どこ見ているの」と言いがちだが、大人は見えていても子どもは見えていない。そういう時に具体的に子どもたちに言うべきことは「下を見てごらん」。簡単に「同じ」ということではないが、基本、人としてはイコールな

存在として接するべきだと思っています。

市長：ありがとうございます。柳瀬さんはどうですか。難しいですけど。

柳瀬委員：すごく難しい質問で、どういう答えを期待しているのかと思ってしまうと。子どもは確かに存在している。わかっている面とわからない面があるわけで、人間同士一緒に、他の人間がこういう風に思っているに違いないと想像しているわけで、実際にはどうかわからない。僕が子どもだった頃はこうだったよねと思っても、今の子どもには当てはまらないかもしれない。子どもは自由に遊ぶものだと思っていたが、それは勘違いだったかもしれない。そういう意味では子どもを理解する、大人も同じだが、覚悟しておかなければいけないのかなと、どういう存在なのかと。いろいろな答えがあるが、どう答えたとしても反対の答えもある。常に反対概念がある、そんな存在なのかなと思います。

市長：ちょっと補足すると、例えば大人の関係性において、先生との関係性において子どもをどうとらえると良い教育をできるのかととらえてもらえれば。

柳瀬委員：今の答えになるかわかりませんが、知能指数3歳と診断された30歳の女の子がいます。彼女は3歳の子どもなのか、3歳の知能、行動様式をとったり、言葉をしゃべれなかったり泣き叫ぶということだけど、30歳の女性なのですよね。私よく言うのは、3歳のキャリアが違う。3歳のキャリアが30年ある。そう考えると、よく障害者のことを子どもと大きくなって言う人もいるけど、キャリアを考えると、一概に子ども、大人と分けることは、常にこの問いに対しては何を想定して言っているかということが付きまとうと思う。人格においては子どもも大人も一緒だし、大きい、小さいの違いだし。

市長：あるいは教育において子どもはどのような存在かという点。

柳瀬委員：教育において、教育の言葉の問題がありますし、上から教えるという意味ですし、小野村さんの言うように稲でいうと育っていくもの。稲の苗の段階と、植えて田んぼに入って大きくなって分けつして穂が出てという成長段

階があるわけですね。それは間違っただめですね。苗の段階で肥料をが
んがあげては育ちません。その時その時に必要なことがあって、百姓はそれ
を管理している。変な時に肥料をあげては余計だめになる。お米をいっぱい取
ろうとしていっぱい稲を植えたら藁ばかりでお米ができないとかを見してい
るので、そういう意味では子どもというのは苗であったり若いころ、成長の段
階。ただし、一つ言いたいのは、子どもが、小学生は中学生の準備をしてい
るのか、中学生は高校生の準備をしているのか、高校生は大学生の準備をして
いるのか、いつも何かに追われて、何か成長しなければいけないといつも言われ
ている。そういう育ち方と、子どもには子どもの世界があって、子どもの時に
しかないできない充実感、幸せをきちんと持たなければいけない、人間として
子どもを扱う面が欠けていると思う。門脇先生の言う楽しい、楽しいというの
は、子どもが自分の人生を充実しているというのが大事で、そういう環境をつ
くってやらなきゃいけない。いつも準備しているという危険性があると思う。
そうすると、学校というのは、屋根をかけているとかおっしゃったが、意識と
して肥大化しているのではないか。子どもはもっと豊かな社会環境というか、
家庭の中で学校というのが位置付けられていたはずなのに、学校が巨大化して
しまって、もしかしたら学校の中に小さな社会をイメージしているような、本
当は大きな社会の中に学校があるはずなのに、巨大化している気がする。それ
が、物理的な話だけではなくて、子どもの内面まで立ち入ってしまって、ノー
トはこうとりなさいまでくるわけでしょ。これはやっぱり方向性が違うと思
う。

市長：ありがとうございました。伝わりました。倉田先生はどうですか。

倉田委員：子どもは未発達で可能性を秘めているものかと思う。無条件で何で
も吸収する力がすばらしい時期であって、方向性もどのようにもできる時期で
ある。考え方によっては、与え方によってはどのようにでも変わる存在だと思
う。要するに可能性を多いに秘めているのが子どもだと捉えている。

市長：ありがとうございます。鈴木さん。

鈴木委員：非常に難しい問いで。近代ヨーロッパでは、子どもという概念はなくて、子どもではなく「小さな大人」と考えられていて、7、8歳くらいになると工場に働きに行ったようですけど。その後に「子どもの発見」というのがあって、私たちが学生のころ、25年くらい前ですかね、教材に「子ども時代を失った子どもたち」という本がありました。柳瀬委員もおっしゃったように、準備、準備、先取り、先取りをして、なるべく早くできたほうがいい、なるべく早く教えたほうがいいということで、今を生きていない、生きていないだけでなく楽しめていない、子ども時代を子どもとして生きていないという視点がその時に提示されたことを思い出しました。私なりに、子どもというのは、皆さんと同じ考え方ですけど、未発達なのだけれども可能性を秘めていて、ロックも言ったように、「子どもは白紙の状態生まれてくる」という言葉があります。その白紙の状態、自分の持っている真っ白なキャンバスに何を描くかが重要なのですが、どうも大人が描いてしまっている、描くものを教えてしまっていると思っていて、そうではなく自分で描いていくことを見守って支えていく、その対象が子どもなのではないかと思っています。

市長：ありがとうございます。教育長、子どもとは何か。誰か。

教育長：教育学者の端くれとして言えば、次の社会の担い手とついつい見ます。だから、次の社会というのはどんどん良くなってほしいという私の期待も込めて、今我々が住んでいる社会よりもよい社会をつくっていくことができるような存在として見ている。だから我々の世代はできるだけその能力を遠慮なく発揮してもらえよう働きかけをしていく必要があるのではないかと。教育学者としてはそのように見ますね。一人の大人としてみれば、子どもはその子なりのいい人生を実現していく権利を持っている人間と見ますね。だから、学校巡りをして子どもたちが勉強している様子を見ると、どの子もいい一生を、幸せな一生を送ってほしいという目で見えてしまいますね。よりよい社会を作ってい

くというよりも、一人の人間として、80年とか90年という人生をああこういう一生でよかったと思いながら死んでいくような存在。大人としての見方ですかね。まとめて言うと。

市長：どうしても、あえて鈴木さんが言ったような質問、国家主義的な世界観の中での子どもに対するアプローチ、いい社会という言葉が途端に危うく響いてくると思いますが、幸せな個人が集まって結果として幸せな社会が作られる、全体を見ながらなんだけど自分の幸せを追求していくことは社会全体の幸福と矛盾しないということなのですよ。それをうまく理解されるのがいいのかな、全体として。と感じますよね。時間が三時までと微妙ですが、そういう中で、最後一つだけ聞くとすると、我々公教育です、今のところ。この質問は前もしたかもだけど教育大綱はどこまで扱うのですかというのは、答えはどうでしたか。私立教育は入るのですでしたか。入らない。教育大綱の管轄は、そこは立ち入るところではない。我々つくばの公教育を考えれば良いということですかね。どうだろう、色々プライベートスクールはあるけど、公教育が担うことと私教育が担うことは違うべきか、同じでよいか、あるいはいまや私学にも補助金が入っているから半分公教育だという見方もあるかもしれないけど、例えばさっき言ったように自分の子どもたちみんなインターナショナルスクール入れているけど、公教育って何だろう、我々どこを目指せばよいのか、いかがでしょうか。小野村先生からでいいですか。

小野村委員：今、国家という概念がゆらいできている中で、国民教育としての公教育が存立しえなくなっている。例えば五月にこどもの日を祝うといっても、クラスの半分しか日本人の子どもがいらないという状況も見えてくるわけで、そういったときにどういった教育をするのかなと考えた時に難しい問題があると思います。

ただ、基本的に教育というものには公私の別はなく考えるべきだと思います。そのアプローチ、例えばある学校ではイエナプランで、ある学校ではシ

ユタイナーで、ある学校では農業に重点を置くし、ある学校では音楽に重点を置くし、そういう手法の違いはあったとしても、根本的に目指すところは変わらない。そのあたりをこういった場で、みんなでつくばの教育は何を目指すのかを議論していくことが大事なのだと思います。

市長：倉田先生どうでしょう。公教育。

倉田委員：基本はグローバル化への対応も必要になってくるし、文化の継承も考えなくちゃいけない。その時につくばがどうあるべきかを十分検討しておく、公も私もないと思う。目指すものが同じでなければまずいと思います。小野村先生が言ったように、目指すべき方向性が違った場合には大きな問題になってくるので、この辺をしっかりと押さえておかなければいけないと思います。つくばだけの問題じゃないと思いますが、つくばから発信するという意味では、先進的に良い考え方というか、理想とする方向性をきちっと打ち出していく必要があると思うので、やはりモデルになるようなものを作っていく必要があると思います。

市長：そうですね、やっぱり。フロントランナーになるわけですから。我々は。柳瀬さんはどうですか。

柳瀬委員：公教育の公を「おおやけ」、公共と考えると、公立の学校であろうが、私立の学校であろうが、公共性はある。それに対するものは家庭教育だと思うので、家庭教育と公教育が連携しながら考えればいいのかと思います。つまり、公共というものをみんなでどう考えるか。イギリスなんかはコミュニティスクールと言うし、パブリックスクールというイギリスの制度はかなり私的な教育ですから、パブリックという考え方も違うのですよね。そういう考えです。

市長：家庭教育を考えていかなければいけないですからね。鈴木さん。

鈴木委員：問いが難しすぎて、他の委員の話を聞いてもまとまらないのですが、最後に柳瀬先生がふれた、家庭教育との対比の中で考えるのも一つの糸口かな

と思っています。また、冒頭市長が紹介なさったリーダーの方たちのお子さんがインターナショナルスクールに通っている話を聞いて、なぜ公の教育を選ばないのかと考えた時に、やはり枠が小さすぎて、枠にはまらない子の扱いが、公の教育では対応できないところも、公教育を考える糸口になるかと思いません。

市長：教育長どうですか。

教育長：私もやっぱり、教育として行うことは、本来公教育でも私立でも同じでないといけないと思います。公教育と家庭教育は本来違うべきだと思いますが、私の知り合いの研究者が研究した結果、母親あるいは父親の期待と学校で先生から期待されていることがほとんど重なってきた、という結果を学会で発表していたのを思い出しました。やっぱり成績上げろ、成績上げろ、成績上げろということが共通している。そういう家庭教育のプレッシャーがあるから公教育がその方向に進まざるを得ないことになっているのが現実ではないか。そういうことをつくばでどうするか真剣に考えたほうがいいのではないかと思います。

市長：ありがとうございました。とても難しいというか正解のない問題なのでひとつにまとまるわけではないのですが、今日色んな設問に対して伺った皆さんのお考えの中で何となく整理できそうなところと、おおよそこういうところでは一致しているのかなと思えるような要素があって、そういうものを次回までに整理できるかなと思います。要素、コンセプトとか。ただもうちょっと色んな、どうしても教育は経験論で話すし、私の経験ではみたいなのが横行するし、データで見るとどうなのとか専門家に聞いてもいいし、色んな取り組みをしている人に聞いてもいいし、さっき出てきたリヒデルズさんなんかにもコンタクト取ってみようかなと思っていて、皆さんと共有してからのほうがいいかなと思っていたので、思いがけず共有できたので、そんなアプローチをしていきたい。そういう意味で次回の進め方は今決めきれないのが正直ありまして、どの

ステップがよいか考えたいので、申し訳ないですが次回何するかちょっと言えない、少し積み残した「先生はなぜ忙しいのか」「先生の自己肯定感はどうなのか」ということがあるのですが、その辺は少し触れて、プラスして次の要素を考えたいと思います。場合によっては日程が合えば外部から来てもらうアプローチもあってもいいのかなと。もう少し我々もインプットしつつ、自分達の考えも整理する必要があるのかなと。今日のところはこんなところで宜しいですか。何か皆さんこれは言っておきたかったということは。はいどうぞ。

小野村委員：メールでも差し上げて、既に改善していただいているのですが、今日の日程を確認しようと思ましてホームページを開いたところ、「総合教育会議 つくば市」で検索して出てきたのが守谷市のページで、つくば市がまったく出てこないという状況でした。つくば市のサイトに入っても非常に見にくい場所でした。

外部の方々に入っていただくことは私も賛成です。今日も一般の方の参加が少ないですけど、もっと多くの方に見ていただいて、そこから色々な意見を拾っていく、拾っていくなんて失礼ですね。御意見をいただいていくことが大事だと思います。広報をもう少ししっかりしていただきたいと思います。

市長：ホームページは改善できたんですね。会議録も載せてもらっていますけど、大事な部分なので。傍聴者の方も3名ですかね。ちょっと距離がありますね。もっと近くてもいい気がしますけど。他にはよろしいですか。少し整理する時間をいただければと思います。イエナプランだけじゃないけど、イエナプランのさっきのDVD全部手に入れて、それぞれの委員の皆様に変えて見ていただいてというのはやっといいていいのかと。イエナだけじゃなくて、モンテソーリもあればレジヨエミアもあれば色々あるんですけど、たぶんイエナはある程度色々な要素の中から、思想は抜いていないけど、ある程度は汎用性の高いものに、色々なものを組み入れて使っている気がします。それは早めに手に入れて、皆さんにお配りしていただければと。どうもありがとうございます

様式第1号

た。

事務局：どうもありがとうございました。本日は長時間に渡りまして、御協力
いただきましてありがとうございました。これをもちまして平成30年度第2
回つくば市総合教育会議を終了いたします。本日はありがとうございました。

平成 30 年度第 2 回つくば市総合教育会議次第

日時：平成 30 年 6 月 27 日（水）13 時 30 分～

場所：5 階庁議室

1 開会

2 市長挨拶

3 協議事項

(1) つくば市教育大綱の方針について

4 閉会

事務局：総務部総務課

：教育局教育総務課

総合教育会議で検討する 10 の問

- 1 こどもたちは学校を楽しんでいるか？
- 2 こどもたちは授業を楽しんでいるか？
- 3 卒業時にこどもが知っているべきことは？
- 4 学校は何をやる場所なのか？
- 5 先生の役割は何なのか？
- 6 先生はなぜ忙しいのか？
- 7 先生の自己肯定感はどうなのか？
- 8 公教育の目的はどこにあるのか？
- 9 こどもはどういう存在なのか？
- 10 変えなくてはならないことは何なのか？